# 簡単な人生

エッセイ集

伊井直行

レワニワ書房

# 簡単な人生

伊井直行

# 前書き

「簡単な人生」は、平成二五年（二〇一三年）三月から五月にかけて、西日本新聞の文化面に同題で五十回連載した短いエッセイをまとめたものです。

連載開始前の予告に、おおむね次のように記しました。

私の本業は小説家です。でも、事情があって、この三年、小説を一本しか書いていません。大学教員もしています。これも本業です。私にとっては、どちらも懸命に取り組まないとできない仕事です。

本業を二つ抱えた生活は簡単じゃありません。いや、どんな人でも、生活が簡単だなんてことは滅多にないでしょう。

では、何故こんなタイトルなのでしょうか？　この先の人生を、もう少し簡単に暮らせたらという願いをこめて。なぜ人生は簡単ではないのか……考えてみると、不思議なことです。

その後、ほぼ六年の時が流れ、平成の世は令和となって、私の身の上も変化し（当時は専任教員でしたが、今は非常勤講師）、中に登場した人や事象についても変化がありました。ただし、その辺りの記述には手を入れておらず、注記もしていません。

一方で、細かな加筆修正をしています（内容自体は新聞掲載時と大差ありません）。十分に注意したつもりですが、誤字脱字等が残っている可能性があります。その節は、ご容赦を。

令和元年五月　　伊井直行

# 目次


日豊本線 6
準急ひかり 8
博多のおじいちゃんの家 10
「単純な生活」 12
「シンプル・ライフ」 14
うたかた 16
校歌 18
物語のように小説を書くこと 20
初めての新書 22
有名と悪名 24
読む、考える、書く 26
カレーうどんと会社員小説論 28
二人の自分 30

「サラリーマン」という言葉 32
犬も猫もいないので 34
私の中の他人 vs 私の中の私 36
続・私の中の他人 vs 私の中の私 38
結婚式の招待状 40
昔の師と今の先生は違う 42
決断（と威張る程ではない） 44
大学教員の三つ目の仕事 46
充実した三月 48
学生のためになるのは？ 50
学生にやさしい 52
授業に夢中？ 54
吸い込まれる 56

一パーセントの真実 58
反省 60
猫の話 62
犬の話 64
ベアの話 66
朝が苦手な話 68
朝、目が覚める話 70
自動車を見分ける話 72
手のかかる「子供」 74
原稿用紙の使い方 76
還暦だって？ 78
死への恐れ 80

制作委員会 82
作家と小説家 84
超ら抜き言葉 86
変化の時代の日本語 88
ひらがなのちめい 90
言葉の戦場、言葉の遊び場 92
戦場の中の雅な社交 94
「世界観」の拡大と縮小 96
レッテル 98
噂と小話 100
私という宿命 102
イージー・ライフ 104

# 日豊本線

私の故郷は宮崎県北部に位置する延岡市である。幼い頃は、延岡が日本の中心だと思っていた。根拠は、走っている鉄道が国鉄日豊本線で、その四文字の中に「日本」が入っていたことだ。当時、いや、今でも日豊本線は宮崎県内では単線で、日本の中心を走る鉄道路線にしては少々貧弱なのである。

もう少し歳が進み、一九六〇年代はじめ、小学校二、三年のころか、親戚の見送りだか出迎えだかで延岡駅に行き、長細い箱形の列車がホームに停車しているのを発見した。それまで、私は延岡駅では蒸気機関車しか見たことがなかった。大いに感激して、翌日学校に行くと、担任の先生に、延岡駅で電車を見ました、と勇んで報告したのである。ところが、先生は冷静な口調で、それは電車ではない、と断言した。

同じ列車を見たわけでもないだろうに、なぜ断言できるのか不思議だった。先生はこう言った。

「そいはディーゼルカーじゃが」

蒸気機関車と電車の他に、ディーゼルカーなるものがあると知った最初である。確かに、

その列車は、蒸気機関車の煙ほど盛大にではないが、電車ではあり得ないはずの排気煙を細く吐き出していた。

当時、日豊本線は県内では電化されていなかった。延岡に電車は存在しなかったのである。大人には常識だが、子供で、特に鉄道好きでもない私には理解の外だった。日豊本線の電化が進み、延岡を電車が走るようになるのは一九七四年（昭和四九年）のことである。

この一件で、私は、延岡が電車も走らないほどの「田舎」であることを思い知らされた。故郷延岡を日本の中心とする私の幼い「世界」は、崩れ去った。この驚くべき発見は、しかし、私の「郷土」への愛情を少しも減じなかった。

さて、日豊本線は、私を、長く私の知る唯一の「都会」だった博多へと結びつける路線でもあった。

# 準急ひかり

故郷延岡を離れて四十年余になる。私は今も郷土愛の人間だが、四人の祖父母に延岡出身者はいない。父方は愛媛県の出、母方は新潟を根とする人間である。延岡は地方都市なのに意外に「余所者」が多いのだ。

小学校時代まで、母親の実家は福岡市にあった。母方の祖父が大正時代に東京から小倉に越し、北部九州の風土を気に入って、当地に居を定めたのである。祖父母の家は西鉄薬院の駅からずいぶんと歩く住宅街の中にあった。福岡、というか博多は、私がたまに行くことのできる「都会」だった。

路面電車も屋内アイススケートリンクもスパゲッティ・ミートソースも、ここが初体験だった。延岡では映画は三本立てが当たり前だったので、一本だけしか見られない博多の「ロードショー館」は羨ましくなかったけれど。

延岡から博多まで、国鉄の準急「ひかり」によく乗った。当時「ひかり」は日豊本線を走っていたのである。名前に反して遅い列車だったはずだが、そんな風に感じた記憶はない。子供だったから、時間はゆったりと流れていたのだろう。また、列車に乗ること自体が楽し

い非日常の経験だった。動く景色を見ながらかしわ飯を食べ、停車時間に冷凍ミカンを買って……。

非日常経験の最たるものは、小倉駅で停車した後、それまで前進していた列車が、突如として後退し始めることだった。だいぶ後になって、日豊本線から鹿児島本線へと路線が変わり、最後尾が先頭になったのだと理解した。だが、当時はガッタンと揺れて逆方向に進み始めるたび、心底驚き、しばらく不思議で仕方なかった。

一九六四年、東京オリンピックの年、東海道新幹線開業が開業した。「ひかり」の名は「夢の超特急」に召し上げられた。代わりに日豊本線の準急に与えられたのは、「日輪」という冴えない名前だった。悔しかった。準急「ひかり」には、子供時代の夢が詰まっていたのである。

# 博多のおじいちゃんの家

博多に向かう準急「ひかり」は時にひどく混んで、列車の連結部近くに押し込まれたことがあった。小学生の私は、鉄製の二枚の踏み板が素早く別個に動き、蛇腹が自在に伸び縮みする様に目を奪われた。私は臆病で、連結部が何か邪悪なものに操られているようで怖いのだが、同時に魅了されてもいた。そこだけが列車ではない別の世界のようだった。

博多は、私にとって「都会」という異郷だった。西鉄電車が終点で岩田屋デパートに滑り込むことが不思議でたまらず、その様子は私がよく見る悪夢の一部になった。幼時から今に至るまで、なぜだか私の夢はやたらと悪夢が多いのだが。

「博多のおじいちゃんの家」もまた異世界だった。そこは、延岡の町外れにあった庭のないわが家より田舎じみていた。借家なのに広い裏庭があって、鶏を飼い、たくさんの菊を育てていた。街灯はなく、周囲の窓明かりも心細いくらい少なくて、夜には犬の遠吠えばかりが響いた。朝起きると、家の外の蛇口で顔を洗い、歯を磨いた。

一方、朝食は都会風で、トーストと蜂蜜とリンゴ、飲み物は紅茶か牛乳。母方の祖父は、ちょっとだけ洒落者だったのだ。青山師範（今の東京学芸大学）を出たが教職が肌に合わず、

会社員に転じたという人だった。

しかし、博多の祖父母宅の記憶の中で最も鮮明なのは、ノスタルジックな思い出ではなく、前後の脈絡のない一つの情景である。

夜眠れなくて目を開けると、夜空を移動する飛行機の赤い航空標識が見えた、というたったそれだけのことだ。夏休み中で、雨戸は開け放たれていた。環境が変わって眠れないという体験は、子供でもあり得る。だが、その不眠の記憶には不安の気配が張りついていた。当時は言語化できなかったその時の気分を、いま意訳すると、こうなる。

「眠ることがこんなに難しいとは知らなかった。となると、この先の人生もそう簡単じゃないかもしれない。困ったなあ」

# 「単純な生活」

子供の人生は簡単だろうか？　そう思うのは多分大人の偏見だ。幼い子供でも、子供なりに色々と考えたり悩んだりして生きているものだ。ただ、大人になってからの大変さは子供時代とは質も量も違うので、子供なりの苦労に目が届きにくくなる。だから大人は子供をもっと気遣うべき、などと言いたいわけではない。内心の問題なら子供は子供、大人は大人、それぞれ自分で考えることができる。子供だって、そう思っているに違いない。

問題なのは、生まれてから死ぬまで人の生が簡単ではすまないという宿命だ。それで肩が凝ったり、頭が痛くなったり、胃に穴が開いたりする。鬱病になり、さらに悪い経過をたどる場合もある。もっと単純な生活ができたら、人は今より幸せになるのではないか？　だが、それこそが難しいのだ。

阿部昭という作家はこう書いている。

いくら単純な生活の綺麗ごとを掲げて、浮世のしがらみや日々のしんきくさい雑事から逃れようとしても、人生はこれを許してくれないのだ。

この連載のタイトルに込めた逆説的な意図を、阿部が明かしてくれている。それは実は当然である。右の文章は、阿部の著書『単純な生活』からの引用だが、連載のタイトルは、この作品から拝借しているのである。「単純な生活」を英語にすれば多分「シンプル・ライフ」で、「シンプル・ライフ」は「簡単な人生」とも訳せる（と思う）。

阿部は一九三五年に生まれ、一九八九年に亡くなった、地味だが力のある私小説作家で、数は多くないものの熱心な読者がいた。昨今、殆ど話題に上らないのは残念だ。

『単純な生活』は、高度経済成長期以降に書かれた最上質の散文作品の一つと私は思っている。元は婦人雑誌の連載で（一九八〇年～八二年）、作者がエッセイとも小説とも明かさなかったから、散文作品と言うしかない。スタイルとしてはエッセイだが、私の書き手としての勘では、フィクションと判定したくなる箇所がいくつかある。

# 「シンプル・ライフ」

前回引用した阿部昭の文章中「単純な生活の綺麗ごとを掲げて」という一節は、彼の文章にしてはややぎこちない。これは、阿部が連載エッセイを始めるに際して「単純な生活」というタイトルを選んだ事情と関係がありそうだ。

阿部が婦人誌で連載を始める前年、以前から洒脱なＴＶＣＭで知られていたレナウンが、男性向け服飾ブランド「シンプル・ライフ」に、高倉健らをＣＭに使って斬新なキャンペーンを行った。「シンプル・ライフ」は単なる流行語を通り越して社会現象化した。この言葉は、当時の「中流」の人々が求めていた華美でなく貧相でもない現代的な生活スタイルをうまく表現していたのである。

今、ＣＭをネット上の動画で見ることができる。俳優も音楽も映像も掛け値なく格好よく、全然古くなっていないのに驚く。いや、現在のＣＭにこの高いレベルのものはないだろう。近年、ＣＭを含むＴＶ全体の質が低下がひどいと思う。食品のＣＭで、子役に「おいしい」と叫ばせて平気なのが現況なのである。阿部は、作家専業になる前には東京の民放局の社員だった。今生きていたら、どう思っただろう？

阿部は「シンプル・ライフ」という言葉には全く言及していない。執筆前に「単純な生活」という題名に決めたせいで書くのに難渋している、とぼやくだけだ。しかし、阿部は、「シンプル・ライフ」など、人間の実際の生活ではあり得ないと知っており、そんな言葉をもてはやす世の風潮に異議をはさみたくて連載のタイトルにしたのではないか。先の一節は、阿部が明かしたその真相のように見えなくもないのである。

以下、ネット上の百科事典Ｗｉｋｉｐｅｄｉａを参考に記す。阿部の三人の息子の内の一人は、後に父と同じ東京の民放局の社員になり、バラエティー畑の敏腕制作者となった。彼は「単純な生活」連載当時には中学生～高校生であり、作者自身を除けば作中最も印象深い「登場人物」である。

# うたかた

阿部昭「単純な生活」の最大の魅力は、家族持ちの中年作家の日常を、さりげなく、しかし明るい日の光の下にさらすようにゆるぎない形として描き出したことにある。大事件は起こらない。読んで退屈する人は間違いなくいる。だが、その魅力に引き込まれると離れがたくなる。

作者が近所の川土手を散歩して鴨の親子を観察する。

彼等がくちばしで羽毛を散らすたびに、川面をわたる風が、それを川下へ吹きやる。ぱっ、ぱっ、と雪片が飛び散るみたいだ。私は見ているだけで寒くなり、おもわず首をすくめ、ポケットの中で拳をにぎりしめる。

繊細で生き生きとした描写だが、単なる観察の面白さというのではない。そこには苦みを含んだユーモアの味が含まれている。鴨の観察の少し前に、こんなことが書かれている。

私の考えでは、川は海と違って、ただそこにあればいいというものではない。川は毎日人間に見つめられる必要がある。……そうでなければ、川はただの水路に、下水も同様のものになってしまうのである。

人の生は浮いては消える泡のようなもの、と古人は記した。阿部は逆のことを書いているように思える。しかし、そうではない。所詮はかない生しか持たない人間が、海にはかなわないけれど、川なら上に立てる……と虚勢を張っているのだ。無常なのは、もちろん個々の人間の方である。

こうした日常生活の合間に、不意に鈍色（にびいろ）のナイフの刃のような挿話が出現し、読者は「単純な生活」が逆説であることを改めて思い知らされる。

前回記した安部の息子は、父も兄も入った地元の湘南の名門公立高校への受験に失敗し、滑り止めの用意をしていなかったため、家中が右往左往することになる。その有様を、阿部は嘘偽りなく書くと宣言し、実行する。恐らく息子としては、家族には打ち明けても、外に出したくなかっただろうことまでも。容赦なく。

# 校歌

親しかった同級の友人たちに、突然背を向けられる――辛い話だ。阿部昭は、息子が高校受験に失敗して、そんな経験をしたことを隠すことなく記す。だが、こうしたことは、先の人生においても起こり得るし、歳を経てからの経験が十代の時より辛くないわけでもない。阿部は、息子の「人生を感じた……」という言葉を否定する。

「そんなものが人生なものかね。人生っていうのはもっといいものだよ」

人生が簡単なはずはない。だけど、辛さで人生を計ろうなどと思うな――。

阿部は「単純な生活」の初めの方で、心臓が「ぱたぱた」するので時々医者にかかると軽い調子で書いている。ところが、後半部に至って心臓病で二ヶ月間連載を休んだことが明らかになる。命にかかわる事態だったが、その報告は簡潔だ。それから十年と経たない内に、「ぱたぱた」は阿部の人生を奪い去る。享年五十四。自身の人生を削り取りつつ書かれた彼の文章は、しかし芸術家ぶらないあくまで平明なものだった。

阿部が今生きていたとして、パソコンやネットについて好意的だったとは思えないが、おかげで作品を読む新しい視点を発見できたりもする。ネットがなければ阿部の息子のその後

の「成功」について知ることはできず、私は彼の受験の顛末を話題に取り上げることを躊躇しただろう。

作中、阿部は頼まれて近在の「O小学校」の校歌を作詞した、と記している。すっきり短く二番までにしたが、発表会で聞くと物足りない。阿部は校長と相談し、三番を付け足すことを約束した。校歌の話はここまで。

私は全容を知りたくなり、ネット検索で学校のサイトを見つけた。早速、校歌のページを開くと、なんと二番までしかない！　思わず、笑った。

「富士がみえる　風がはしる」短いけれどとても素敵な藤沢市立大庭小学校の校歌を、ぜひ検索してみてください。

# 物語のように小説を書くこと

思いがけず、阿部昭「単純な生活」に深入りしてしまった。自分より先に他の作家のことを延々と書くとは……実は、まだ彼については書きたいことが残っている。いずれ他の話題にかこつけて触れることにしよう。

私は、連載前の告知に「事情があって、この三年、小説を一本しか書いていません」と記した。少し見栄を張った気がする。厳密に勘定すると、実際には四年に近いのだ。しかも、今の調子だと五年になりそうな勢い。去年、文芸誌に長めの短編を一作書いたら、一仕事やりとげたつもりになってしまい――。

いまのところ、私が最後に書いた長い小説は『ポケットの中のレワニワ』という変なタイトルの作品だ（書き下ろしの単行本だったが、去年文庫が出た）。派遣社員と引きこもりの義兄弟、ベトナム難民の娘らに、実在だか非実在だか不明のレワニワという「怪物」がからんで話が進む。私小説とはほど遠い物語風の長編小説である。私のデビュー作からして、魔法で雨蛙にされた青年がいかにして人間に戻るか、というストーリーだった（「草のかんむり」）。阿部昭は、尊敬しているものの影響は受けなかった作家ということになる。

物語風の小説といっても、荒唐無稽な空想で頭を一杯にすれば書けるわけではない。『レワニワ』のアイデアは、東南アジアからの元難民が多く住む団地に、どんな小説を書くか当てもないまま何年も通っていたら、ポロリと生まれ出たものだ。ストーリーは、登場人物の後を追う内に形になった。

他の作家なら、「勝手に主人公たちが動いて」といった類の「楽屋話」を読んだことがあるけれど、自分では初めての経験だった。登場人物を追いかけながら書いていると、それまで経験のない幸福感が湧いて来ることもあった。その感覚が忘れられず、次も十分な熟成期間を置いて長い小説を書こうと思う内、時は素早く流れ、ほとんど小説家失格状態となった次第。これが、告知の「事情」の一である。

「事情」の二は、しかし、その間なにも書かなかったわけではなく、小説以外の作物に必死になっていたことである。続きは、次回に。

# 初めての新書

自分の読者の数が少ないのは自慢できないが、私の読者が私には過ぎるほどいい感じの人たちだということは自慢したい。

以前は、偶然出会った読者がいかにも感じが良かったのでそう推測していたのだが、最近はネットで読者の反応を直接知ることができるようになり、そこでも似た気配を感じさせる文章が見つかることから、確信を持つようになった。ただし、一方には酷い評もあって、気の弱い私は自著の評を読む勇気がなかなか湧かず、反応を網羅的に確かめてはいない……それでも私は確信している（強弁？）。

二〇一〇年、『岩崎彌太郎　会社の創造』（講談社現代新書）が刊行されたとき、そうした読者は大いに驚き、かつ困惑したようだ。小説家としての作品とかけ離れている上に、「龍馬伝」放送中に刊行というタイミング。

岩崎彌太郎とは三菱の創始者であり、「龍馬伝」でナレーター兼副主人公格、香川照之が「怪演」したあの人物である。

私は以前から岩崎彌太郎に関心があり、〇七年には彌太郎の故郷高知県安芸市に行って資

料集めをしている。翌〇八年、ＮＨＫが翌々年の大河ドラマ「龍馬伝」の発表をし、中で彌太郎が重要な役割を果たすことが明らかにされた。私は彌太郎に関してすぐに本を書くつもりはなかったのだが、発表を見て気が変わった。ドラマの彌太郎は、実際とは違う人物に脚色されることが分かったからだ。〇九年は、大学の仕事以外は殆どすべて、初めての新書を書く作業に費やした。

大河ドラマの彌太郎は、思慮浅く、エキセントリックで嫉妬深いという実像からほど遠い人物だった。新書では彌太郎の真の姿に接近し、できる限り事実を明らかにしたつもりだ。史料を（こちらは網羅的に）読んで、そこから読み取れることだけを書いた。小説的な潤色は一切ない。ＮＨＫ大河の前では蟷螂（とうろう）の斧だが、少数でも良き理解者を得られたと思っている。

# 有名と悪名

岩崎彌太郎の三菱こそが日本で最初の「会社」だ、と私は考えている。

人間が蛙になるような小説をひねり出す一方で、会社員を主な登場人物とする小説を書き、会社について考えることを、二十年以上続けて来た。どれも私のライフワークである。

だから、ＮＨＫの大河ドラマに史実無視の彌太郎が登場したことには落胆した。歴史ドラマにフィクションを加えるな、と言いたいわけではない。虚構化も批判的な視点もあっていいが、その裏に、日本の歴史や歴史上の人物への敬意があってこそ表現は生きる。「国民のＮＨＫ」のドラマなのに、そうした敬意が欠如していることに驚いた。

「龍馬伝」以前、彌太郎は忘れられた人物だったが、第二次大戦前までは「有名人」だった。ただし、「有名」の半分以上は「悪名」である。幕末維新期の混乱に乗じて成り上がった「政商」、自由民権運動の敵対者――こういった「悪名」は、全て間違っているわけではないが、作られたイメージという面も大きい。「龍馬伝」にも、そのイメージは影響したようだ。

私は、新書で悪玉を善玉に書き替えたわけではない。ただ、悪玉イメージによって見えなくなっている彌太郎の一面、つまり、近代資本主義に不可欠の組織である会社を作り出した

功績をクローズアップしたかった。これは、実は日本における会社の誕生に関する「新説」でもある。現在まで反論はない。無視されている、とも言うが、私の説への追認と取っておこう。

彌太郎の時代の三菱は海運会社だった。当時、鉄道網もトラック輸送も存在しなかったから、物資の大量輸送や重量物運搬の手段は船しかない。しかし、そうした手段として優れた蒸気船を使う国内の海運は欧米の会社に牛耳られていた。彌太郎が三菱という「会社」を作り出し、彼らに対抗しなければ、その後も国内の物資輸送の要は外国に握られたままだったかもしれない。私は彼が悪党だったと思わないけれど、もしそうだったとしても、この悪党の力は当時の日本に必要なものだった。

# 読む、考える、書く

岩崎彌太郎の評伝は、当初の目算より早く世に出た。私としては、まず会社、会社員とは何かを明らかにした上で取りかかるつもりだったのだ。

新書が発刊された直後、文芸誌「群像」の連載で、会社員小説を通して会社員という「謎」を解き明かす試みを始めた。小説連載の申し出に対して、私から逆に提案したものだ。

会社員とは何なのか、たっぷり考えた。必要な本も読んだ。大学で会社員小説を題材に授業をしたので、講義ノートもある。今こそやるべき、と思ったのである。ちなみに、会社員小説というのは普通にありそうな言葉だが、私以前には、このような言い方をした人はいない（サラリーマン小説、ではありません。念のため）。

ところが、いざ連載に取りかかると想定外の問題が出現し、読むべき資料や作品が次々に見つかる。先行研究の存在しない、未知へのチャレンジだったからだ。かくして「読み、考え、書く」を同時並行で行うことになった。それはまことに苦しく、また甘味な時間だった。

一年半の連載をまとめた『会社員とは何者か？　会社員小説をめぐって』は、三三〇ページ弱の分厚い本になった。簡単でわかりやすい解説と明快な結論を望む読者には、冗長で、

小難しい本に見えると思う。迷い、悩みながら書く過程が文章の中に入り込んでいるのだ。しかし、「真実」に近づくためには私にはこの方法しかなかった。だから、探究の過程自体を面白がってくれる読者がいたことは嬉しかった。

で、いつの間にか、最後に小説を書いて二年半が過ぎていた。そうなると、もしや小説の書き方を忘れたのではないかとひどく不安になり、ちょうど一年前の三月、私は（比喩的に言えば）震えながら小説を一本書いた。書けたので安心して……今に至る。まるでタイムマシンに乗って、一年前から今日という未来に飛ばされて来たみたいだ。

# カレーうどんと会社員小説論

カレーもうどんも好きだが、カレーうどんを食べたいとは思わないなあ、と口にしたら、カレーでもうどんでもない「カレーうどんのおいしさ」があるのだ、と反論されて参ったことがある。元々カレーもうどんも嫌いな人は少なく、カレーうどんは名前だけでも人を惹きつける。私のようなひねくれ者はたぶん例外だ。

会社員と小説とを合わせて論じようという「会社員小説論」は、どうだろうか？

小説が好きな人は今も多いし、難解な文芸批評も意外なほど読まれていたりする。大学の教員や学生だけでなく、一般の文学好きにも難解を厭わない人がいる。ただし、ツボを外すと見向きもされない。会社員と小説というテーマは、こうした読者のツボから光年単位で計らないといけないくらい遠い。

会社員の読者はどうか？　会社員は母数が大きく、本好きの絶対数は少なくない。忙しいのによく読めるなと驚かされる読書家もいる。ただ、ビジネス書に向かうのが多数派で、小説好きはそれより少なく、中ではミステリーや時代小説を好む人が多いようだ。会社員が何者か、会社員である自分が一番よくわかっているし、会社員小説論なんて興味ない――と言

われたら、拙著『会社員とは何者か？』は、会社員の読書のツボから宇宙の果てくらい遠いことになる。

結局、会社員と小説を合わせて論じても、カレーうどんにはなれないようだ。かくして、私の本の読者はなかなか多数派に成長しない。

それはそうなのだが、この本の刊行後、文学好きの読者が、私の小説論について私の視野を超えた議論を展開したり、会社員の読者が、私の会社員論を土台に会社員と会社の関係について思いもかけなかった考察をしたり、といったことを目にした。こんな読者がいるのかと嬉しく、また空恐ろしくもあった。いい加減な妥協をしないで良かった、と思った瞬間である。

# 二人の自分

会社や会社員に謎がある、と言っても、ピンと来ないかもしれない。公私ともに順調な会社員なら、特にそうだろう。だが、勤めの中で行き悩み、会社員であることに疑問を感じる人はいるはずだ。私はそうだった。

二十代の私は駄目社員で、会社を辞めた後も会社員時代につきまとった違和感について考え続けた。それが会社を舞台に小説を書き、会社員の正体を研究することにつながった。

そこに謎はある。大学図書館に備えられた幾種類もの経済学事典、経営学事典のどれにも「会社」という項目はなかった。「会社」は学問的に定義されたことがないのだ。

会社法には、会社は法人とするという条文がある。株式会社など四種類に区分されるとも書かれている。しかし、法による「定義」は事実上これだけだ。ちなみに法律上「社員」とは株主など会社の所有者のことなので、先の「駄目社員」という言い方は法律的には誤りである。

会社がいつ、どんな風に始まったのか調べても、「株式会社の誕生」に関する古い本が見つかるだけだ。会社＝株式会社ではないはずなのに。

自力で答えを探すしかなかった。その答えが岩崎彌太郎の三菱だったのである。

会社の存在基盤は金銭にある。いくら社会貢献の理念を掲げていても、実現するには利益が必須だ。そんな利益目的の組織に、私たちは強制ではなく自らの意思で加入する。だが、全てを会社に捧げるのではない。私生活は自分のものである。こうして会社員としての自分と、それ以外の自分とが分裂する。

「公私」の区分は、日本においては明治維新期、身分と職業とが分離した時に生まれた。会社が誕生した基盤はここにある。この時、身分＝職業の拘束を離れて、個人や家庭の幸福を追求することが可能になったのだ。近代がもたらした「恩寵」だった。それで、人が本当に幸福になったのかは別として。確かなのは、体は一つなのに「二人の自分」を生きることになり、人生が複雑になったことだ。

# 「サラリーマン」という言葉

よくできたエッセイやエンタテインメントの小説は、読み終えると、人生や世界は分かりやすいシンプルなものだと感じさせてくれる。世界は無限の多様性で満たされ、私たちの人生にもたいてい上昇下降、紆余曲折がある。そうした作品は、人生や世界を筋道の通る受け入れやすいものに整理し、変化や多様性に疲れた私たちを癒してくれるのだ。

私の場合はどうか？　世界を世界の複雑さのまま読者に手渡していると思う。私はよく自分の小説が世界の模型のようであってほしいと夢想するが、その際、世界を縮小しても簡略化はしたくない。結果、話が面倒くさくなりやすい。こんなこともある。

この連載中、私は「サラリーマン」という言葉を殆ど使わず、会社員という言葉ばかり用いている。これはたまたまではない。

サラリーマンという言葉は「ネクタイ・背広のホワイトカラー」をすぐにイメージさせるものの、社会統計がニュースになる時には（例えば「サラリーマンの平均所得」）、「給与所得者一般」の意味でも使われる。考えればすぐに分かることだが、ホワイトカラーと給与所得者が意味するものは同一ではない。給与所得者である現業労働者は決して少なくないが、

ホワイトカラーは「オフィスワーカー」である。長年、この齟齬は放置されて来た。

ホワイトカラーが世間の平均的勤労者であるかのように錯覚されているのは、この言葉の二重性によるところが大きい。ホワイトカラーが社会の多数派であったことは、一度もない。私はできるだけ正確に人間や社会を表現したいので、この言葉を使わないことにしている。

拙著『会社員とは何者か？』を読んだ人は、右の所見を詳しく知ってしまい、以降「サラリーマン」という言葉が使いにくくなるらしい。私の本を読んだばかりに、ただでさえ簡単ではない生活に、さらに一つ制約が加わるわけだ。

世界を複雑さのままに受け入れる気持ちを持つ人は、私の潜在的読者だと思う。この連載にも、そんな心の広い読者がいてくれますように。

# 犬も猫もいないので

自著の話が続いてしまった。私の日常が単調で、エッセイの材料に不足があるせいだ。旅行に行かない、料理しない、子供がいない、犬猫を飼っていない……。今回で自著の話はお終いの予定。これから書くことは、もしかすると宣伝ぽく感じられるかもしれない。でも、違います。宣伝ではなく、自慢です。

拙著『会社員とは何者か？』には「会社員小説をめぐって」という副題がついている。会社員を主要な登場人物とする小説の数々――「サラリーマン小説」の代表者だった源氏鶏太に始まり、二十一世紀の女性作家、外国の作品まで取り上げている。

私は書評を書くのが苦手で、依頼があってもできるだけ断って来た。そのため、小説の分析を行うことに実はためらいがあった。だが、このテーマには不可欠なので、一生懸命やった。

すると、続けるうちに面白くなって来たのである。小説を読解するために使った方法――各々の作品の内部で、仕事と私生活とがどのような割合で書かれているのか分析し、会社と家庭との分断の有様を見極める――が有効と確信できるようになったからだ。これによって、

それまで誰も気づかなかった作品の面白さを発見できた……少なくとも私にはそうした手応えが感じられた。刊行後、作品の読みについて評価してもらえると、大変に嬉しかった。

東京大学文学部教授柴田元幸氏は、現代最高の英米文学翻訳者にして、文芸誌「モンキービジネス」の編集責任者でもある（スーパーマン！）。同誌は米国で英語版が出ているのだが、その最新号に拙著の最後の二章が英訳・掲載された。カフカとメルヴィルの作品を会社員小説として読み解いた部分である。柴田氏は「斬新」と評してくれたが、私の解釈が「本国」の人々を驚かせる場面を想像するのは、ちょっと楽しい。

# 私の中の他人　vs　私の中の私

事情あって小説を殆ど書いていない、と前に書いた。事情なんて単なる言い訳でしょう、と思った人がきっといるに違いない。本当にやりたいこと、やるべきことなら、人は何とかとするものだ、と。確かに。

言い訳、という言葉は、誰に言われるまでもなく私の頭の中に鳴り響いていた。私は内部の道徳家に叱られている。この口やかましい「私の中の他人」に対して、気は弱いのに頑固な「私の中の私」が抵抗し、現状は後者が優勢である。両者の言い分を聞いてみよう。

**私の中の他人**（以下、**他人**）：三月、勤務先の大学は春休みだというのに、相変わらず小説を書いていないではないか。

**私の中の私**（以下、**私**）：連載エッセイ執筆中だ。自分について書くことがいかに我が身を消耗させるか、かの阿部昭も語っている。小説を書くより簡単なわけではない。

**他人**：今は授業がないのだから、エッセイと小説を同時にやればいい。そうしている人は、

いくらもいる。

**私**：私の能力不足である。

**他人**：能力が足りないのは分かっているが、あんた、エッセイを書いている時間より、ネット上のしょうもない記事やら動画やらを見ている時間の方が長いではないか。

**私**：集中力という能力も足りないのである。

**他人**：自虐に見せかけた屁理屈だ。あんたは常々、二つのことが同時にできない性質なので、学期中に小説を書くのは難しいと威張っていたではないか。なのに今は、ちょっとエッセイが進むとネットをのぞき、またちょっと書いてはネットを……の繰り返し。えらく器用にやってる。

**私**：ネットを見るのに能力はいらない。たぶん猿でもできる。

**他人**：エッセイは苦手、難しいと泣き言ばかりのくせに、減らず口は減らない。で、いつになったら小説を書くんだ？　まさか、夏休みになったら、とか言うんでは？（以下、次回）

# 続・私の中の他人 vs 私の中の私

小説を書かないことをなじる私の中の他人（以下、**他人**）と、屁理屈をこねて書かないことを正当化しようとする私の中の私（以下、**私**）の対話、前回の続編。勤め先の大学が春休みであるにもかかわらず小説を書かない「私」に、「他人」は次の夏休みまでサボるつもりかと詰め寄る。「私」は何と答えるか？

**私**：夏休みになったら書くつもりである。

**他人**：それまでは書かない。が、夏休みには書くというのだね（ニヤリと笑う）。

**私**：そのつもりだ。ただ、確信は持てない。

**他人**：はあ？（顔をしかめる）　今はエッセイを書いている。だが、夏休みに小説を書かずに、何をするんだ？

**私**：他人とはいえ君も私なんだから知っているだろうが、大学の夏休みは以前よりずいぶん縮小している。小説は書きたい。他にも書きたいものがある。しかし、二つともやる時間はない。

**他人**：小説以外に書きたいものとは？

**私**：会社員論を、今度は会社員小説を経由しないでやってみたい。

**他人**：おや、また、そちらか。困ったもんだな。やりたいんなら、小説を完成させた後にすればいい。

**私**：いや、小説はきっと長くなるから、書き始めたら、いつ終わるかわからない。

**他人**：だったら、その会社員論とやらを先にやれ。

**私**：ずっと小説を書いていないから、今度の夏休みに小説を書かないと思うと、ひどく気がとがめるんだ。

**他人**：アホか。要するに決断するのが怖いだけだろ。あんたみたいなグズとは付き合いきれない。バイバイ。

**私**：感じの悪いやつ。でも、他人（あいつ）がいないと永久にどちらを先にするか決められない気がする……待ってくれ。

二人は「ただの私」を残して消え去った。このジレンマを解決する方法はあるだろうか？次回以降に答えを探る。

# 結婚式の招待状

私のゼミの卒業生から結婚式の招待状が来た。学生時代の彼女はしっかり者で、無口な彼とはお似合いの美男美女カップルだった。

理系の学部や文系でも伝統のあるゼミでは、卒業後、学生から教員に結婚式の招待が来ることは珍しくないだろう。ゼミの先生が仲人をすることもよくあったらしいが、今は媒酌人の制度自体が廃れた。学生と教員との関係も変化した。概して在学中の関係は前より近く、卒業後は遠くなったように思われる。

元ゼミの学生とも卒業後はコミュニケーションがなく、突然の招待で少し驚いた。同時に、この嬉しい知らせに、感慨とでも言うしかないやや感傷的な思いも湧いて来た。

今、現役の作家で大学教員をしているというケースはかなり多い。創作系の学科やコースを持つ大学が増えたからだ。私の所属している東海大学文学部文芸創作学科は二〇〇一年四月一日に発足した。創作系学科・コースの一番手ではないものの、以降、増加する先駆けになったようだ。嘘ではありません。

私はこの学科の創設にかかわっていた。実現したのは作家T氏の絶大な人間的力量のおか

げであり、私は補助的な役割だったが、学科のコンセプトづくりと認可申請のための書類作成は懸命にやった。特に後者、文部省（当時）向けの作業は面倒かつ多量で、時間的制約も厳しかった。私は徹夜ができないので、午前二時まで書類作成、目覚ましをかけて四時に起き、残りを片付けて朝の内に学校に届ける、といったこともあった。

こうして自分も「創造」に加わった学科で、学生どうしが出会い、家庭を持つ。小説はあくまで文字であるが、学科には人という実体があることを実感した。そんな感慨だった。

……ここで、突然、前回の話の続きになる。学科創設のために時間に追われていた当時、私は小説を書くことにも意欲的だった。エッセイや書評も引きうけていた。すべてを同時並行で。

# 昔の師と今の先生は違う

東海大学に文芸創作学科を創設されてから二、三年、私は学校の廊下をたいてい早足で歩いていた。そうでない時は走っていた気がする。

スタッフはみなしっかりした人たちだったのだが、学科の全体像は、まだ誰にも見えていない状態だった。私は認可申請の仕事をして、中では一番分かっていた——分かっていなくてはならなかったので、当然なすべきことが多かったのだ。もちろん、授業も。

振り返ると、忙しいというより、新しい状況に馴れなくて焦っていたのだと思う。今、わが大学の先生たちはとても忙しいのに、そこまで焦っている人はいない。だが、いつも悠々としている先生というイメージはもうないだろう。師走という言葉を聞かなくなったのも、当然だ。昔の「師」と今の「先生」とは違うのである。

夏目漱石「三四郎」の三四郎は、大学入学後の新学期、教師も学生も誰も学校に来ていないことに驚く。私たちの学生時代にも、海外での研究とかで先生が新学期の始まりにいないことは珍しくなかった。その当時、ゼミを持つ教授・助教授は、年間一、二科目しか講義形式の授業を受け持っていなかったと思う。今、これをやったらクビだ。

十年ほど前、健康診断の最中、定年間近と思われる二人の先生が話をしていた。
「今の大学は、改革、改革で――」
「若い先生たちはこれから大変でしょう」
必要だから改革を行うのだと思うが、大学がかつてのようなのどかな場所でなくなったのは確かだ。そして、変化は続く。私も、今の若い先生たちは大変だと思ってしまう。優秀な新しい先生たちのおかげで、私は楽になったわけだが――ここで、前回に続いて、突然話が前に戻る。だったら小説を書くのに使える時間は、前より増えているのでは？　確かに。

## 決断（と威張る程ではない）

決めてきました。

七月になったら、小説を書きます。ここで、うだうだ言っていたのは、みっともないことでした。

文芸誌の編集者の前で口にしたので、覆せません。長編ではなく、去年唯一発表した長めの短編の続編になるはずです。

変なたとえですが、自白するつもりなどなかったのに、取調室で刑事の前に座ったら、自分でも思いがけず告白を始めてしまった、という感じです。ちなみに、取調べ室に連れ込まれた経験はまだありません。

……

実は、十年くらいエッセイを書いていなかった。なのに、この連載エッセイを引き受けたのは、突き詰めると「気が変わったから」なのだが、エッセイを書かないことが自分で「逃げ」のように感じられた、というのも理由だったと思う。何か学べるのでは、と潜在的に考えていた節もある。

今、私は学んでいる。エッセイは多かれ少なかれ自分を材料にするので、嫌でも自分の姿を直視してしまうこと。自分は、うだうだとして決断力に欠けた人間だということ。そんな自分を書くのが嫌でエッセイを断り、逆にこの辛さを体験したくて、今回引きうけたらしいこと。

阿部昭もそうだが、私小説作家というのは怖い人たちだ。彼等は自分に向き合うという恐ろしいことを、自らの義務にするのだから。彼らは勇気があるのか？　そうとは限らないだろう。鏡の中の自分が好きな人、自分を世間にさらしたいという欲望を持つ人は確かにいる。私は世間から隠れたい方だが、自分をさらけ出すことに楽しみがあるというのも理解はできる。

結局、私小説作家に限らず、どの作家も書きながら自分を見極めていくしかないのだ。改めて、そう思う……何だか最終回みたいな書き方だが、連載はまだ半分にも達していない。これからもお付き合いください。

# 大学教員の三つ目の仕事

今、大学教員には三つの仕事がある。

少し前までは、大学教員の職務は研究と教育の二つであると言われていた。研究は、芸術系では美術や音楽などの創作や演奏活動に替わり、文芸系では執筆活動となる。

それ以外の、例えば学務関係の事務などは「雑務」と称され、仕事扱いされなかった。だが、最近は「雑務」ではなく、事実上、研究・教育と並ぶ三つ目の仕事になったと考えられる。

三つ目の仕事は様々である。

新学年が始まると、東海大学の全学部学科で新入学生のためのガイダンスや研修会が行われ、大学がどんな場所で、どう勉強したらいいかを伝授する。たぶん、たいていの大学で同じだと思う。え！　大学でそんなことをするのか、と驚く人と、当然だと思う人と、年齢でくっきり分かれるだろう。

大学、学部には、広報、就職など各種の委員会がある。私は三つの委員会に所属している。「オープンキャンパス」が、ほぼ一年中、合わせると十回以上行われる。高校生に来校して

もらっての説明会である。受験生を集め、優れた新入学生を確保するためだ。事の性質上、若い先生が担当する方が好ましいので、私の出番は最近は少ない。

東海大学には付属中高があり、彼らに大学を紹介するためのイベントがいくつか。夏期には中高生と一緒の合宿があり、当学科の教員は全員が参加する。

教員と保護者の懇談会。全学の全教員が分担し全国を回る。この手の行事は東海大学が元祖らしい。

入試業務。入試は主なものだけで五種類くらい。九月に始まって、二月までである。試験監督は非常に緊張する。問題を作る担当者はさらに大変だ。

この他にも、学科学生向けの行事や、学外向けの模擬授業、イベントなど——書き切れない。

# 充実した三月

今時の大学教員は、研究・教育以外に「三つ目の仕事」をこなしているわけだが、だからといって一般の勤労者より大変かというと、そんなことはない。

以前は牧歌的だったのが、少し世間並みに近づいたというところだろう。ただ、研究者としての大学教員は、ものを考えたり、本を読んだりする静かな時間を必要としている。昔習ったところでは、学者、学校の語源スカラーは古代ギリシア語で暇を意味する、とか何とか。そんな時間は確保しにくくなった。

一方で、大半の大学はもはや就職前の最後の教育機関と割り切るべき、という声もある。既にそういう方向に進んでいる向きもあるらしい。ただ、そのことを公にすると、それって本当に大学なの？　と疑問を持たれてしまう。大学がいま過渡期にあるのは確かだ。

最近まで、夏休みと春休みにはそれぞれ一ヶ月くらい、教員が研究や創作活動に専念できる期間があった。だが、一昨年くらいから夏休みの一ヶ月が厳しくなって来た。東海大学だと、四月に始まる春学期の終わりが延び、期末のテストは八月初めに行われるようになったのである。普段でも、土曜日に授業が設定され、祝日に授業を行うこともある。数年前、ク

リスマス・イブの日に講義を行った際の学生の不満そうな表情は、忘れがたい。

三月は、大学教員にとって自分の専門領域の研究に没頭できる大事な月なのである。私にとって、この三月はどうだっただろう？　連載エッセイを書いていたので、小説という専門領域からは外れていたことになる。しかし、前にも書いた通り、続けていく内に、文章を書くことに関して新たに何かを学んでいるという実感が湧いて来た。充実した三月を過ごしたと思う。

大学の話の最後に、次回から、今時の学生と教員との関係や授業のことについて語りたい。ここが苦労であり、またやりがいでもある。

# 学生のためになるのは？

次の二つの内、どちらが学生のためになる授業だろうか？

一、学生を惹きつける面白くてわかりやすい授業。

二、退屈で、聞く努力をしないと理解できない授業。

一は普通に考えて良い授業だが、二が悪いかというと、こと大学においては悪いとも言えない。大学は、専門知識だけでなく、自分の頭で考える習慣を身につける場所でもあるからだ。そういう意味では、一は学生が苦労しないので良くないという見方も成り立つ。ただし、面白い授業の方が、そうでない授業より内容も充実しているケースが多い、との説が有力だ。

今、大学の教員は、一のような授業をしろとハッパをかけられている。私は二のような授業もあっていいと思うが、自分のこととなると、そうもいかない。面白くてわかりやすい授業を行うことは、私にはとても難しい。学生にどう伝えるか、学期前も学期中も、色々と考え、工夫をする。

大学の先生たちに余裕がなくなった理由の一つは、こうした「授業を改善せよ」というプレッシャーだろう。この結果、若い世代によく考えられた面白い授業のできる先生が増え、

一方で、古手の教員にはそれがさらなるプレッシャーになる。面白い授業を経験した学生は、退屈な授業への耐性が下がるだろうから。教員は、こうした学生の「表情」に動かされている面がある――そのものズバリ、「学生による授業評価」の制度が、今やたいていの学校にあるわけだが。

どんな学校でも、学生は毎年同じ年齢で、教員は年々歳を取る。そして、授業準備に費やす時間は年ごとに増える……私の場合はそうだ。別に嫌ではない（ちょっと疲れますが）。工夫が功奏すると嬉しいし、学生と真剣に接することは、確実に自分のためにもなるからだ。

# 学生にやさしい

私は車好きだが、車で近所の街には出かけない。恥ずかしながら、駐車が苦手なのだ（駐車以外は下手でない、つもり）。隣り駅くらいの距離は、たいてい歩く。

隣り駅へ歩く際の経路に、国産車のディーラーが三軒並んでいる。車が出庫する場面によく遭遇するが、係りの人はみな、車が角を曲がって見えなくなるまで見送る。長時間、深々とお辞儀をする人もいる。かつては、ここまで丁寧な応対はしていなかったはずだ。

こうしたやり方の起源は、実はハッキリしている。国産大手メーカーが高級車専門販売網を作った際、極端に丁寧な応対を始めたのだ。それが高級じゃない（？）ディーラーにも波及した。原価のかからないサービスだからだろう。

客はこうした過剰な丁寧さを望んでいるだろうか？　私は遠慮したい。しかし、一旦始まると、突然やめれば失礼と思われそうだし、他がやっている時に自分のところだけやめるのは勇気がいる。誰も得しないサービス競争のように見える。

さて、大学の話である。最近、対学生、対保護者でとても丁寧な対応をするようになった。単なるサービス競争ではない、と大学内部の人間としては思いたい。例を挙げる（私の勤務

する東海大学のものとは限らない）。

・新入学生向けに、大学に馴れてもらうための導入授業を組む。
・休講の連絡が、各学生の携帯にメールで配信される。
・各学生の授業への出席状況を保護者がネットで確認できる。
・休みがちな学生には、教員の方から学生、保護者に連絡する。
・成績について学生から疑問が提出された場合、根拠を示して説明する義務がある。
・学生が授業評価を行い、教員はどう対応するかネット上に書き込まなくてはならない。

他にも色々。学生にやさしいのだ。悪いことじゃないだろうが、あえて不親切にして、学生に苦労させることも必要だと私は思う。

# 授業に夢中？

新学年が始まっている。年ごとに学生は違う。今年の新入学生の「個性」がそろそろ見えて来る時期だ。

前々回、私は授業のために色々と考え、工夫をしていると書いた。しかし、授業準備のために毎週何十時間も割く向きもあるとかで、そんな先生とは較べものにならない。研究もきちんとしていたら、寝る時間もないだろう。

大学教員として、それはやりすぎだ、と私は思う。前々回、学生に親切過ぎる授業の問題点について書いたが、この先生の莫大な準備は学生にものを考えさせるためかもしれないので、そこは論点としない。では、何が問題か？

ここで、阿部昭「単純な生活」に再登場してもらう。阿部が息子の中学校の校長に驚く話がある。彼は入学式でいきなりこんなことを言うのだ。

「きょうからわたしがお子さんを預かりますけれども、だいたい他人の子にそんなに夢中になるわけはないでしょう」

この後、校長は親が子供に注ぐ愛情の深さについて経験談を語り、こうした愛情は他から

期待できるものではないと続ける。阿部は納得する。

さて、大学教員の真の愛情は、たいていは授業より研究の方にある。研究をしたい人が大学に残るのだから。といって、授業に手を抜く人は今では例外だ。大学教員の多くは、研究と教育（とその他の仕事）の時間配分に四苦八苦している。

高校までの先生にとって、少なくとも学校の中では生徒が最も大切な存在だろう。大学の教員にとって、学生や授業は最も大事な対象の一つであり、そうした存在は相対化される。だが、教える——教えられるだけではない大人同士の人間関係は、この相対化から始まるのだ。大学教員が過度に授業に打ちこむと、学生はこのステップを見失う。それはよろしくないと私は思うのである。

# 吸い込まれる

新学期になり、授業が始まると、小説を書く余裕はないと思ってしまう。しかし、以前はこうではなかった。どうにかして授業や校務の合間に時間を作り、時には睡眠時間を削った。無理ができなくなったのか？　無理をしたくなくなったのか？

多分、どちらでもないと思う。

前に書いた通り、大学の中で、私個人は最も忙しい時に較べて楽になっている。ただ、精神的に、学生や授業や学校に「吸い込まれる」度合いは却って強くなったと感じるのだ。それがちょっとつらい。

「吸い込まれる」とは変な言い方だが、学生や授業や学校から、自らの心神を切り離すのが難しくなった、というほどの意味である。それらのものから、強引に我が身を引きはがさないと小説が書けなくなったのだ。以前は、もっと強く、柔軟だったと思う。勘定してみると、非常勤時代からもう二十年近く大学で教えているのだ。その割に「教師」の風格は身につかないが……悪いことではないということにしておきたい。自分で言うのもなんだが、全然「偉い人」にならないので。

しかし、いずれ本当に吸い込まれてしまいそうになったら、教員か小説か、どちらかをやめなくてはならない。どちらを選ぶかは最初から決まっている。教員をやめるのだ。たとえ定収入を失おうとも、小説に命を賭ける、というような勇ましい話ではない。ごめんなさい。文芸創作学科では「現役の書き手」が教員をするのが原則なので、執筆をしない人間にはいる資格がないのだ。明文化された規則ではないけれど。

こんな風に話を進めると、大学で教えることが創作活動の妨げになっていると誤解されそうだ。それは違う。私の場合、大学教員業は明らかにプラスである。岩崎彌太郎の新書や会社員小説論を本にできたのは、大学図書館のおかげだった。本業の小説でも、大学にいることは役立っている。

# 一パーセントの真実

私が（今のところ）最後に書いた長編小説である『ポケットの中のレワニワ』の主要登場人物は、大半が二十代である。時代設定は、リーマンショックが起こる直前までの数年間。小説を書いたのは二〇〇八年、五十四歳から五十五歳にかけてである。なんだ、若かったんだな、と思ってしまうのは、私が今年還暦だからである。

二十代の人物を小説に登場させるのに、いわゆる取材や、誰かをモデルにすることはしなかった。頭の中からひねり出したのだ。自分の年齢と三十歳差！　これほど離れた年齢の人物を作り出すのは、簡単ではない。だが、書いている間、無理をしているとは感じなかった。自分の心の届く範囲で若者を描き出せば、それで十分に通用するという自信があった。

その自信は、明らかに大学で「今時の若者」と接するところから生まれたものだ。還暦近い人間が現代の若者を心底まで理解できると考えるなら、それは幻想である。だが、今の若者を、昔自分が若者だった頃と丸で違うものと見るのも間違いなのだ。そのことを教員生活が教えてくれた。

また、昔も今も人間は千差万別であり、「今の若者のリアリティ」の全体像を知っている

人間は、若者を含め、どこにも存在しない。しかも、内容にたった一パーセントの真実しかなくても成り立つ（ことがある）のが、小説の奥深さである。ただ、その一パーセントには本当らしさの核となるものが必要不可欠だ。現代の若者を表現するのに必要なリアリティの核が何なのか、短い言葉で表すのは不可能だが、私はそれを教員として学生たちと接する中でつかんだのだと思う。たぶん。

経験や知識は、我が身と心の奥底をくぐり抜けたものでなければ、強い表現の力にはならない。私は不器用なので、教員稼業をこなすには、ともかく全力でやるしかなかった。それが小説を書く力になった。前回、大学にいることがプラスだったと述べたのは、こういう理由からである。

# 反省

すごくよく反省する。四六時中していると言ってもいいくらいだ。時々、あんまり反省し過ぎだと反省する。

こんな反省癖のある人間になったのは、親に褒められた経験がないからだと思う。殴られも、怒鳴られもしなかったが、ともかく褒められない。代わりにしょちゅう問題点を指摘される。コップを割って叱られ、母親がコップを割ると、あなたがそんな所に置くからでしょと叱られる……これを書くとまた叱られるな、とまた反省。

妻は日頃から私とは共通点がないと主張するのだが、親から褒められたことがないことに関しては、まったく同様だと認めている。変なところに共通点があったものだ。もしかして、昔は褒めずに育てるのが普通だったのだろうか？

突然こんなことを言い出したのは——前回、大学での教員生活が小説家に有意義な理由を書いたので、じゃあ、学生から見て物書きの教員はどうなのか述べる必要があると思った。すると、途端に私の頭の中は反省事項で一杯になったのである。

学生が教員をどう見ているかを知ることは、実はとても難しい。匿名の授業評価でも、少

数を除いて、学生はあまり悪い評価をしないものだ。個々の反省事項は授業に活かすとして（うまい言い訳？）、こんな自分の授業でも何とか学生のためになっていると思われることを挙げてみよう。

我が学科のカリキュラムはとてもいいと自負している。だが、その内容を小説や批評の書き手自身の声や表情や身振りを通して伝えられることが、さらにいいのだと思っている。学科の教員は、物書きとして読者に向けている表の顔だけでなく、隠したい背中までも学生には見せてしまうのだ。結果、こんな人間にはなりたくないと思われるかもしれないが、それは仕方ないこととして。心配なのは、この体を張った「実物教育」が、どこまで理解されているかだ……と書くうち、また反省したくなって来た。ここで授業は終わり。

# 猫の話

本やら大学やらの話がだいぶ続いたので、そろそろ猫の話なんかをしたいと思うのである。猫を飼っていないのに、なぜ猫なのかというと、エッセイといえばやっぱり猫だからだ。かの内田百閒の「ノラや」に始まり……あれ、次が出て来ない。そう言えば、猫のエッセイを色んな人が書いているのを切れ切れに読んで、ああ、猫を飼えばエッセイを書けるようになるのかもと羨んでいただけで（前に書いた通り、エッセイはこれが十年ぶりくらい）、好んで猫話を読んでいたわけではなかった。

妻は猫が大好きで（犬も大好き）、うちに犬猫がいないのを残念がっている。気の毒なことに。今はネットの猫動画で我慢している状態だ。ひいきの猫ブログがあり、それをたまに半強制的に見せていただくのだが、その猫のかわいらしさ、動画の美しさは驚くべきものだ。姿を現さない飼い主の愛情や、撮影への手間のかけ方に感嘆する。

しかし、今、その猫の名前を思い出そうとしたら、やっぱり出てこない。かわいいなと思っても、それだけなのだ。私は、戦後から前世紀末くらいまでの自動車、特に国産車の名前なら、たぶん今でも大多数を言える。わざわざ覚えたわけではない。勝手に頭に入っていた

のだ。この記憶力やメモリー容量を他の有意義なことに向けていれば、私はもっとましな人間になっただろう。おまけに自動車の話はエッセイに向かない。

先日、某出版社を定年退職した元編集担当者と食事をしたら、猫の話になった。彼女も猫好きなのだが、話題は、猫を飼うと物書きの仕事の口が増えるとか、猫の本はよく売れるとか、そんなことだった。犬好きは飼っている犬と、精々それと同じ犬種にしか興味がないが、猫好きは「猫みんなかわいい」となるので、いいのだそうだ。やっぱりうちも猫を飼っておけば良かったかな……いや、そんな邪(よこしま)な思惑で動物を飼ってはいけないのだ。反省。

# 犬の話

猫の話の次は犬である。犬は飼っていない。これから暫く、エッセイの定番ネタ（最近は「鉄板」という言い方もあるようだ）に挑戦してみることにする。

前回、犬のエッセイは猫ほどのポピュラリティーがないという説を紹介したが、もちろん犬をめぐるエッセイは山ほど書かれている。私が思い出すのは、一月に亡くなった安岡章太郎氏の愛犬をめぐるものである。

「この犬（コンタ）については、飼いはじめたばかりの頃から……さんざん書いて、少なからぬ原稿料や印税をかせいだ」と安岡氏は記している。ここだけ引用すると、金儲けのために飼ったのかとあらぬ誤解を生みそうなので、同じ「犬の愛情」から、紀州犬コンタがすったもんだの挙げ句に交尾を成功させた美しい場面を引いておこう。

「見るとさっきまでいがみあっていた二匹の犬が、ようやく一体となって白い毛に包まれた体躯を重ね合っている。それは意外にも、醜いものでもワイセツなものでもなく、ひどく静かな、そのくせ植物が花を開かせるような自然の生命力を感じさせるような光景だった。」

安岡氏の文章を書き写していたら、突然思い出したことがある。犬の話題の次いでは気

が引けるが、書いておきたい。

私は一年だけ「三田文学」の編集長をしたことがある。その間に遠藤周作氏が亡くなり、追悼特集号を出すことになった。安岡氏に追悼文を依頼したところ、氏の原稿は締め切り間際に届いた。それまで追悼文は姓名の「あいうえお順」に掲載するつもりだったのだが、安岡氏の原稿を読んだ途端、これを先頭に置くしかないと考えが変わった。文章に格別の重量感があり、先頭以外の場所ではおさまりそうになかったのである。

犬のエッセイを書くつもりが、安岡氏の愛犬コンタのように脱走して終わった。あしからず（今回は故人の氏名に敬称付きとした）。

# ベアの話

今度こそ、ちゃんと犬の話を書こう。

私の住む宮崎県延岡市に、大分県別府市から伯父一家が越して来た。母方の伯父伯母と従兄二人の四人家族に、ベアという飼い犬を連れて。私は小学校低学年、一九六〇年代初頭である。

ベアは、従兄たちが別府の川原で拾った雑種だった。茶色い毛並みの中型犬である。純血種の犬を飼うのは田舎では例外で、雑種を拾ったり、もらったりして育てるのが普通だった。

越して来ると、ベアは伯父の家と我が家とを往復して暮らすようになった。当時は鎖につないでおかなくても平気だった。野犬取り締まりにあい、保健所にもらい下げに行ったこともあったらしいが。

うちに来ると、ベアはいつも玄関脇の日陰にのんびり横たわっていた。ただゴロンとしているだけである。おとなしい犬だった。ある時、友人たちと、犬は尻尾を踏まれるとものすごく痛がるというが、それがどのくらいのものなのか、ベアを相手に試してみることになった。今さらだが、ベア、ごめん。

玄関脇に無防備に横たわっているベアの尻尾を、私が踏んだ。記憶では、そうきつくなく。ベアはキャインと小さな声を出し、彼にしては素速く立ち上がると、すごく嫌そうな顔をして叔父の家へ帰っていった。しかし、翌日もベアは同じ場所で横になっていたのである。

伯父一家は、やがてうちの近所から延岡市の別の場所へ越した。年をとっても、ベアは二つの家の間を行き来し続けた。間には二キロ以上の距離があった。後で分かったことだが、ベアは、両方の家の中間にある自転車屋さんで一休みしていたのである。そこではベアではない別の名前で呼ばれ、餌までもらっていたらしい。

ベアは天寿を全うしたが、私には死んだときの記憶がない。野良犬とも飼い犬ともつかない雑種の犬を、町で普通に見かけた頃の話である。

# 朝が苦手な話

子供の頃から、朝が苦手だった。小学校低学年の頃、午前七時前という「早朝」に目を覚ましたのが誇らしくて、近所に住む伯母に自慢しに行った記憶がある。伯母は、当惑したに違いない。自分が目を覚ますのが遅いことに、私は心の奥でコンプレックスを感じていたようだ。

小学校で遅刻する子供はまれだと思うが、私は時々遅れた。五年生のある時、学校に到着するとすでに朝礼の時間で、教室には何かの加減で出遅れた友人一人しかいなかった。

これから校庭に行くと遅刻したのがばれる。私は教室から出ないことにした。友人も一緒に残った。一人じゃなくてラッキーだと思った。同時に、かすかな胸騒ぎがしたのを覚えている。

私のいない校庭で、何度も私の名前が呼ばれたらしい。悪いことではない。私は表彰されようとしていたのだ。小学校では出席を取っていなかった。保護者から連絡がなければ出席として、それで間に合ったのだろう。

担任にはなぜか叱られず、表彰状と記念のバッジをもらった。私はまずいことをしたとい

う呵責の念と共に、再度ラッキーとも感じていた。叱られなかったことと、朝礼で表彰を受けるという恥ずかしい目に遭わずにすんだことについて。

当時、某全国紙が児童詩のコーナーを各県版ごとに持っており、表彰とは、その宮崎県版に私の詩が掲載されたことに対するものだった。担任は詩の指導に熱心で、生徒に書かせてはまとめて応募していたのである。

一九六〇年代、九州東部の小学校で、男子生徒のヒエラルキーは喧嘩の強さと運動能力で絶対的に決まっていた。私は泣き虫で運動神経が皆無に近く、底辺に属していた。私の願いはそのランクの底から脱出することであり、詩で表彰されることなど何の意味もなかった。五年生ともなると、喧嘩も運動もこれから何とかなるなんてことはないなあ、と分かり始めてはいたのだが……。

# 朝、目が覚める話

中学に入っても、朝起きと運動と喧嘩が苦手なのは変わらなかった。高校生になると、学校自体が苦手になった。後に登校拒否、不登校と言われるような状態に陥ったのである。

高校は運動と喧嘩だけで何かが決まるようなことはない。成績が進路に直結して皆にのしかかるからだ。ここで勉強を頑張れば、少しは学校に馴染めたかもしれない。しかし私は遅刻と不登校を繰り返し、成績も低迷、またも学校内の下位カテゴリー（今度は成績）に落ち着いたのだった。卒業できたのは、見捨てないでつきあってくれた少数の友人たちのおかげである。

浪人して大学に行き、さらに社会人になっても、朝が苦手なのは変わらなかった。だから一生そうだろうと思っていたら、違った。今や、七時より遅く目を覚ますことはない。普通はもっとうんと早い。五十歳頃にそうなった。尿意でということもなくはないが、たいていは何となく。目覚まし不要。

我が家から、私鉄の最寄り駅が見える。ホームに明かりがないと、早すぎるのでもう一回寝る。始発の時間には駅に明かりが灯る。この場合は、外が暗くてもパジャマから部屋着に

着替える。

お湯を沸かし、コーヒーをいれる。正確にはコーヒーではない。大麦とライ麦を焙煎したインスタントの代用コーヒーである。以前は肝臓にいいという漢方のお茶を飲んでいたが、γ-GTPの数値が改善された数年前から、これにした。「インカ」と南米を連想させる名前がついているのに、なぜかポーランド製。私はおいしいと思っているが、本物のコーヒー好きは認めないだろう。

インカ・コーヒーを飲みながら、まずはPCでネットをめぐる。その後、学期中なら授業の準備、原稿が忙しい時は原稿書き。他のどんな時間より捗る。しかし、二時間も経つと、眠くなる。どんどん眠くなる。早く目を覚ますようになっても、私は相変わらず朝に弱いのだ。今度は目覚ましをかけ、もう一度ベッドの中へ。目を覚ましたら、慌ただしい二度目の朝が始まる。

# 自動車を見分ける話

前に、自動車の話はエッセイになりにくいと述べた。でも、一回だけ書かせてもらおう。ごく幼い時分、私は道の脇に立って、車が通るたびにフォード、プリンスなどと声に出していたのだそうだ。実際の車名とは一致せず、ただ覚えた名前を口にしていたらしい。

ボールなのか人形なのか昆虫なのか、ものごころがつく前に何を好きになるのか、自分では選べない。私が最初に「恋に落ちた」のは、絵本に描かれたイタリア製のレース用車両だった。当時「フェラリー」と呼ばれていたその赤い車の写真は、いま私のパソコンの壁紙になっている。

車以外の分野では、私の記憶力はよろしくない。自著の登場人物の名前やタイトルすら思い出せないことがある。なのに車の名前は忘れない。まさに無駄知識だ。それでも、たまには役立つことがある。例えば――

私は通勤に小田原厚木道路の側道を使っている。その際、金網の向こうの道路で覆面パトカーに捕捉された車両をよく見かける。私は覆面パトに多い車種を遠くからでも見分けられるので、そういう事態に遭遇する可能性は相対的に低いと思う。もちろん車を運転するのに

速度規制を無視することはないが、自動車専用道路を走る際の精神的な安定には寄与している。

もう一つ、車種による走り方の傾向を把握することにも役立つ。一般には良いイメージを持たれているある外国車は、実はマナーの悪い運転者が多く、こちらが優先でも無理に突っ込んで来るようなことがままある。予め用心していたおかげで、少なくとも一度、衝突事故を免れている。

書いていて、少々空しくなって来た。車じゃなく、読んだ本の内容を忘れないのだったら、私はもっと良い小説家になれたかもしれない……いや、そうした人間だったなら、小説は書かなかった気がする。無駄を知らない人は、小説という「無駄なもの」に時間を費すことはないはずだから。

# 手のかかる「子供」

ワープロ専用機の時代から数えると、機械を使って原稿を書くようになって四半世紀である。最初のワープロは、新しもの好きの父親が、買ったはいいが使いこなせず、九州から当時住んでいた川崎市へはるばる送られて来たものだった。これが欠陥品で、ほぼ完成した長い小説が一瞬で消える被害にあった。二台目は実用になった。書き上げると内蔵プリンターでジーコジーコ印刷し、コンビニに行って有料ファックスで原稿を送る。

最初のパソコンは、当時コンピュータの会社に勤めていた義兄から譲り受けた中古品だった。ＯＳはウインドウズ３・１、難しい機械だったが、ネットにはつなげられず、私にはワープロ専用機だった。だが、おかげでパソコンという未知のものへの恐怖が薄れた。ウインドウズ95が導入され、これに乗り遅れると現代を生きる資格がない、というような脅しが世にはびこった時、私はそれに少しばかり冷静に対処できたと思う。

自分で買ったウインドウズ95、次の98、その後のMeのパソコンは、よくこんなものを商品として売ったものだ、というくらいひどかった。機械自体、かなりの頻度で壊れた。ＯＳもそれに載るソフトも出来が悪かった。ただまともに動かすためだけに、一体どれだけの時間

を費やしたことか。金もかかり、ストレスにもなった。これで余計な時間を使わなければ、私はもっと良い作家に……やめておこう。

機械ものが好きな私だが、パソコン関係については憎たらしさが愛情に勝っていた。ところが、スマートフォンやタブレットが広まって、パソコンが時代の表舞台から退場し始めると、妙に寂しくなって来たのである。学生に、お金の問題がなければ、なるべく自前のパソコンを持つよう勧めていたりする。大学では事実役に立つからだが。私にとってパソコンは、いつの間にか、手がかかるが可愛い我が子のような存在になっていたらしい。

# 原稿用紙の使い方

いま私は、パソコンのキーボードに指を置いた状態でなければ、文章を書こうとしても頭に何も浮かんで来ない。

ワープロ専用機を使い始めてパソコンに移行する十年くらいの間は、手書きと併用だった。だが、パソコンの進歩と共に機械で書くことに馴れ、やがてパソコン抜きでは文章が書けなくなった。実は、私の手書き原稿の書き方だと、パソコンの方がもっと簡単に上手くできる。おかしなことを言っていると思われるかもしれない。

唐突ながら、ここで阿部昭「単純な生活」に登場してもらおう。ある時、阿部は東京に宿を取り、原稿書きのための「缶詰め」状態に自らを追い込む。阿部はこんなことを書いている。

「家から持参した小道具を机の所定の位置に並べてみると、きっと忘れたものを思い出すのも癪である。カッターナイフがない、スティック糊と鋏がない（以下、略）」

執筆で宿に籠もるのに、なぜカッターナイフ、スティック糊、鋏がいるのか、すぐに分かった人は原稿用紙の使い方における阿倍の仲間だろう。原稿の直しをする際、文字を線で消

して横に書くのではなく、直す部分と同じ大きさの紙を別の原稿用紙から切り取って貼り付け、その上に新しい文字を書く――阿部はこうしていたはずだ。この文章を読んで嬉しくなった。私もそうだったからである。

古い作家のイメージとして、原稿用紙に文字を乱雑に書きなぐり、気にくわないと原稿用紙をクシャクシャにするというものがあった。だが昔の作家の生原稿を見ると、意外にも、丁寧な文字できちんと枡目を埋める人がたくさんいたことが分かる。尊敬する作家が、原稿用紙の使い方だけでも自分と似ていると知るのは嬉しいものだ。

原稿の見た目をきれいにしておきたいと願う人間にとって、パソコンは、直した形跡を残さずに何度でも切り貼りや書き直しができる点で、実は相性が良いのである。良すぎて依存症になったのが、今の私だ。

# 還暦だって？

今年、還暦である。まったく納得いかない。

還暦っていうのは、自分よりうんと年上の人がなるものだと思っていた。なのに自分が六十歳を迎えるのだ。十代の時には、自分が三十歳になることはあり得ないと思っていた。二十一世紀という「未来」に自分が生き延びる姿など、金星で生活するより想像しづらいことだった。

歳を取るのは自然なことだ。それは分かっている。なのに納得できない。なぜなのか？

理由の一つは、年齢は若いほど価値があるという考え方が社会を覆っているからだろう。「アンチエイジング」が流行り、歳より若く見えることが良しとされる。以前からそうだった。私もそんな風潮に流されてここまで来て、還暦に戸惑っているのだ。

納得できない理由は、他にもある。

幼い子供時代、年上の人間はかけ離れた存在に見えた。小学校低学年の時、五年生や六年生は別世界の偉人だった。だが、自分がなってみれば何てこともない。同じことが中学になっても、高校になっても、大学になっても繰り返された。何だ、自分がなってみれば、こん

なものか、と。

ただ、大学生や社会人、さらに中年になると、この感覚は変化する。年齢の上昇に見合って、自分には難しい「課題」をこなす人たちが同年齢に、やがては年下にも出現するようになるからだ。私の同世代は、このところ子供を社会人として世に出すという難題を終えつつある。なのに、自分は歳を重ねても相変わらずこんな風……。

いけない、また反省しそうになっている。ここは、社会が年齢を重ねることに肯定的な価値観を用意していないせいで、私の心持ちはこんなにも不安定なのだ、と責任転嫁してしまおう。それに、この歳までよく生きてきたもんだと自分を認めてやりたい気持ちも、心のどこかになくもない気がするのだ。

# 死への恐れ

死んだら自分はどうなるのだろうと考える。うまく考えられない。もう一度考える。眠るのとは違うのか？　全然考えが深まらない。ただ、少し死ぬのが怖い気がし始める。

子供っぽいと思われるかもしれないが、これは最近の私の「脳内実況」である。私は死について深く考えたことがない。以前、知人がエリザベス・キューブラー・ロスの『死ぬ瞬間』に感動したという話を聞いて興味を抱き、途中まで読んだのだが、まったく興味を抱けなかった。歳を重ね、当時よりは死が身近に感じられるようになったので、改めて死について考えてみたところ、今も私の頭の中は空っぽだと判明したのだった。

しかし、少しでも死ぬのが怖いと感じたのは「進歩」かもしれない。中学や高校のとき、同級生が、自分が死ぬことを考えたら恐くて眠れなくなった、震えが止まらなくなったなどと話すのを耳にしたことがあった。私は不思議でたまらなかった。死の恐怖を感じたことがなかったからである。自分が死ぬ想像をしても、死ぬときに痛いのや苦しいのはいやだなと思うだけだった。

高校生の時、解説で「作者の死への恐怖」について言及されている文庫本を立て続けに三

冊読んで、驚いたことがある。そして、これこそ若さ故の愚かさということなのだが、当時の私は「こんなにも世の人が怖れている死が恐くない俺って、すげえんじゃね」とちょっとだけだが思ったのである。この「ちょっと」が、その後私の死に対するスタンスになった。死を恐れないことに秘かな優越感を抱くようになったのである。

かつて死への恐れを語った中学や高校の同級生は、還暦を迎えた今、死についてどのように考えているだろうか？　恐怖が緩和されるような穏やかな境地に到達しているだろうか？

そうだと仮定して、一方私の方では、ようやく芽生えた小さな恐れが年齢と共に増殖して行くとしたら、皮肉な展開ということになる。これから自分の頭の中で何が起こるのか、しっかり観察していこう。

# 制作委員会

三月、少年が母親を殺して解体したというニュースがあった。覚えているだろうか？　以前なら、こういう凄惨な事件の余韻は簡単には消えなかったものだ。

私は死を恐ろしいと思っていないのだが、血まみれの死体を扱ったような映像は苦手で、ホラーやスプラッターの類の映画は無料でも見たくない。知り合いに、ああいうのは所詮つくりものだから笑えて面白いという人がいる。そこから本物の人間の死体、まして母親を殺して、というところに至る距離は無限に大きい。だが、一方で血まみれを怖がる世間に対して、自分は特別という意識が共通してあるようにも感じられる。

昨年、高校教師が学校内で教え子を散弾銃で撃ち殺していくという衝撃的な内容の映画が公開された。興行成績は悪くなかったようだ。思うところがあり、頑張ってこの映画を観た。出演した男優が、人によって零点か満点かどちらかの映画だと語っていた。違うと思う。映像や音楽、細部の描写が優れていて、日本映画にありがちなチープさがない。だが書き割りみたいな人間しか出て来ないので、五点満点なら三点。

この血まみれの映画の制作者は「××制作委員会」である。そこには日本を代表する広告

代理店と出版社が入っている。チープな感じがしないのは、潤沢な資金が投入されたからだろう。

この映画では、残酷描写と興行収入とのバランスが、一流会社から集まったメンバーによって検討されたことになる。その情景を想像すると吐き気がしそうだ。委員会に集ったエリート会社員たちは、残酷さに怯まない自分たちを特別だと思っていただろうか？

世の中の倫理観を打ち破る作品はあっていい。しかしそれは、個人かせいぜい一社の責任で作られるべきものだ。少年は一人アパートの部屋で母親を解体した。委員会は集団で各々の社会的責任を薄めつつ、残虐な映画の利益を分け合った。何とも悲しい光景ではないか。一方は罰せられ、他方は利益に貢献したとして褒められる。

# 作家と小説家

これから、言葉をテーマにして書いていきたい。言葉こそ、小説家としての私の興味の中心である。なのに今まで書かずにいた私は、好物を後で食べるタイプということで間違いない。

この欄で、私は「作家」という肩書きになっている。文芸誌「新潮」五月号は一三〇〇号記念号で、「小説家の『幸福』」という特集をやっており、私はそこに「小説家」として参加している。

作家と小説家、普段使い分けてもいないし、大して区別する意味があるとも思わないが、ニュアンスは違っている。右の特集のタイトルを「作家の『幸福』」としたら、確かに少し違って感じられる。このニュアンスの違いを、無理に拡大して明確化すると、左のようになると思う（作家には小説以外の分野の作り手も含まれる場合があるが、ここでは考慮しない）。

作家＝芸術作品としての小説を作る人。
小説家＝商品としての小説を作る人。

純文学とエンタテインメントの違いに相当するように思えるが、ことが簡単でない証拠に、「小説家の『幸福』」特集をした「新潮」はいわゆる純文学雑誌である。つまり、小説は芸術でもあれば商品でもあり、作り手も芸術家でもあれば商売人でもあるということだ。

作家であろうと小説家であろうと、作品を作る材料は言葉である。この材料は、画家が用いる絵の具や、音楽家が用いる音符や楽器とは、根本的に異なっている。それら制作のための専用の道具と違い、言葉は誰もが使う実用品だ。言葉はコミュニケーションのための道具なのである。つまりは公共のものでもあるということだが、それをまるで私物のように、自己表現やら金儲けやらに使う。罪深い仕業である。

そんな実用の道具を使うから、小説は誰にでも書くことができる。だからこそ、本当の天才以外には極めることができないほど、小説を書くことは難しい。

# 超ら抜き言葉

学生が授業で自分の作品を朗読していて、漢字を読めずに詰まることがある。電子的な文字変換だけでなく、電子辞書が普及して手書きでも割合簡単に難しい漢字にアクセスできるので、気軽に難読漢字を使ってしまうが故の悲喜劇である。

一方で、正しいと思いこんでいるせいで辞書を調べないために起こる間違いもある。

「会場入り口に到着すると、永遠と行列が続いていた」

「延々と」を「永遠と」だと思いこんでいるケースは、学生ではもはや珍しいとは言えない。それだけ普及しているのだが、この欄を読んでいるような読者は、こうした誤用に接したことがないかもしれない。ライトノベルと呼ばれる若者向けエンタテインメント小説やネットを通じて広まったものらしい。こうしたある世代から下を中心とする言葉の誤用の例は、他にいくつもある。

言葉の誤用の問題が新聞やＴＶで話題になると、最後に「識者」が登場し、若者が言葉を変えていく、言葉は変化していくもの、誤用がやがて正しい用例に――と収めるのが通例になっている。

本当にそうだろうか？　脚本家の内舘牧子氏は、とあるエッセイで、TV番組で聞いた「ら抜き言葉」の変化型について語っている。

「レストランとか簡単に調べて行けられる」

「自分が出れれるとは思わなかった」

「ら抜き言葉」を普段から使っていると、「ら抜き」では「～できる」というニュアンスが伝わりにくいと感じることがある。内舘氏は、右の二例は、そうした可能の意味合いを強調したくて発せられたものだろうと推測し、こんな言葉が使われるのには「ら抜き」を許した側にも責任があると言う。「常套思考の『言葉は生き物、変化は当然』を猛省する必要がある」

言葉の誤用を放置すると何が起こるか、内舘氏の例は的確に示している。単に「美学」の問題ではない。

# 変化の時代の日本語

「言葉の変化は当然」論者は、意外にも国文系の学者にも多いらしい。彼らは「正しい日本語」という一律の基準が存在しないこと、言葉が時代によって大きく変化して来たことをよく知っているのだ。江戸期の人が漢字の偏や旁を左右逆に置いたり、夏目漱石が当て字を使いまくっていたり。

だが、言葉の変化という事象は似ていても、過去と現在とでは言葉を取り巻く状況が違っていはしないだろうか？

マスメディアの時代からネット全盛の現代へ、社会の変化は加速し続けている。外国語の流入が増加し、日本生まれではない日本語使用者も増えている。

日本が外に対して閉鎖的だった間は、日本語の世界も閉じられていた。仲間内で隠語を使うようなものだから、勝手に変化を加えても了解してもらえた。だが、ネイティブの日本語使用者でない場合、前回記したような野放図な変化についていくことは簡単でない。

日本人は「出れれる」という変な言葉を聞いても、すぐに了解できる。だが、日本語を学習して覚えた人は、それが「出られる」と同じ意味なのか分からなくて、混乱するだろう。

国際化して日本在住の外国人が増える。急激な時代の変化に取り残される人がいる。そういう現代において、言葉を変化のままに任せることは、日本語での意思の疎通を阻害し、日本語を覚えようとする人に無用の高いハードルを課すことになる。

スペイン語やフランス語が、語彙や文法の点で学習しやすい規則性や単純さを持つのは、彼らが広大な海外植民地をスペイン語圏、フランス語圏としたことと関係があるだろう。現代日本語の国際化は、幸いにもそのような事情によるものではない。

言葉に関心を持つ人は、日本語の変化に対して不寛容になるべきだと思う。どうやったって、言葉は変わるときには変わる。だが、そうした変化を善しとしない頑固者がいて初めて、日本語は豊かで風通しのいい言語として生きのびることができる。

# ひらがなのちめい

小倉駅を北九州駅とすべきかどうか、議論が再燃しているとネットで知った。小倉は母方に地縁のある懐かしい名前であり残してほしいが、北九州市の玄関口として知名度に難があるという論にも一理ある。かつて福岡県の北部五市が合併して政令指定都市になる時、北九州は地域の名前だから、市名としては変だと感じたことを思い出した。

しかし、二十一世紀になってからの地名のでたらめさと来たら、「北九州」など物の数ではなかった。空港の愛称にあやかって「南セントレア市」と不動産デベロッパー並みのセンスで市名をつけようとする、とか、市名を命名権売買の対象にしよう、とか。いずれも挫折したのでホッとしたが、そういうことを平気で言い出す人が自治体の長になれる世の中は恐ろしい。

ここまで極端でなくても、へんてこな市名、駅名があちこちにできてしまった。「とうきょうスカイツリー駅」、「業平橋（なりひらばし）」から変更しただけでも勿体ないのに、「とうきょう」とは何？　「東京」だと読めない人がいるとでも？

「いばらきけんにはつくば、ひたちなか、かすみがうら、つくばみらいのよっつのひらがな

のちめいをもつしがあります」

右の文章、読みにくいでしょう？　日本語の、ひらがな、カタカナに漢字が交じりあう文章は、情報を短時間で把握し、記憶に鮮明に残すのに役立つ点で非常に優れているのだ。学習が容易でないという難点はあるが、日本語が世界語になる可能性はないのだから、日本語ネイティブと日本語を努力して習得した人が便利に使えるこの特長を軽視すべきではない。日本語ができることが日本人の強みなのである。

私は小学校の時、記憶力が悪いので、漢字書き取りで0点を取ることがあった。それでも学校に通う内に人並みくらいにはなった（今でもボロが出るが）。英語学習も結構だけれど、日本語の勉強はより大事だ。変な地名をつけ、「うどん県」などと言って喜んでいる大人への再教育はもっと必要かもしれない。

## 言葉の戦場、言葉の遊び場

２ちゃんねる（以下、２ch、通称「にちゃん」）とは、ＴＶのチャンネルではなく、誰もが匿名で書き込み、勝手に読むことのできるネット上の超巨大掲示板である――知っている人にはこんな説明は無用だし、見たことのない人には何の説明にもなっていないかもしれない。

新聞やＴＶで、２chは殺人や爆破の予告、違法薬物の取引など芳しからぬ話題で取り上げられることが多いので、こわい場所と思って人がいるだろう。それは間違いではない。以前は今よりさらに猥褻で差別的で暴力的だった。私は、書き込みはしないものの一時「ヘビーユーザー」だったのだが、初めは嫌悪しか感じなかった。しかし、単に悪の魅力だけで、短期間に一千何百万人もの人が訪れる場所に育つはずはない。

２chの魅力の中心は言葉の力だと思う。言葉を、良い面も悪い面も含めて全開にできる場所。誰でも参加できる言葉の遊び場、言葉の戦場。そんな場所は２ch以前にはなかった。

「世界の七つの真実」という書き込み（レス）が、あちこちでコピペされている（複製されたものが、あちこちに貼られる）。

1　目には石けんを入れることはできない。
2　髪の毛の本数を数えることはできない。
3　舌を出したままで鼻からは息をできない。
4　3をいまを試したでしょ。
5　3を試したとき、実はできる、と分かっただろうけれど、その時あなたは犬みたいに見えてたはず。
6　あなたはだまされたと思って今笑ってるはず。
7　悔しいから仕返しにこのレスをコピペ。

誰が作ったのかは分からない。作者はただ自分の「作品」が拡散するのを（恐らくは笑いながら）見ている。報酬は、評判になることだけだ。それで金を稼ぐ「悪い奴」は、実はネットの外にいる。例えば、2chをネタに原稿料を稼ごうとしているこの私のことだ。ごめんなさい。

# 戦場の中の雅な社交

2ちゃんねる（以下、2ch）は、スレッド（会話が交わされる場所）の数も参加者も恐らく誰も全体像を把握できないほど膨大だ。どこにでも入り込めるし、資格もいらない。では、誰でも参加して楽しめるかというと、実は結構ハードルが高い。

少し前だと、「その話題はガイシュツ」とか「悪のスクツ」と書き込まれたのを見て、「既出はキシュツと読むんだ」「巣窟＝ソークツだということも知らないのか」と指摘すると、「釣り」に引っかかった間抜けとしてバカにされる――そんな読み方を知らないとでも思ったのか、わざと間違えたのに、というわけだ。隠語の世界という点では、不良仲間にも、決まり事だらけの昔の和歌の世界にも似た面がある。

匿名だから言いたい放題、罵詈雑言の嵐というスレッドもある。また、密かに専門家と思われる人が参入して、程度の高い活発な議論が交わされ、下手なことを書くと恥をかくケースも。うかつに入り込めない戦場なのである。そもそも、互いを傷つけ合う殺伐とした雰囲気が持ち味だと参加者自身が認めている。ただし、たまには雅な遊びも行われる。

誰かが「サランラップのかけられた夕飯」というスレッドを立てた。それに色んな人が一行だけのレスをつけ、即興のメランコリックな詩ができあがった。以下はその抜粋。

台所の蛇口から滴る水滴
点滅する留守電ランプ
冷蔵庫の唸り声
飛蝗(ばった)の翅(はね)を運ぶ蟻
あぜ道に放置された錆だらけの軽トラック
家の横を通り過ぎていく子供たちの声
夕暮れの飛行機雲
郵便受けからはみ出した新聞紙
黄ばんだ教科書
西日にキラキラと反射する埃(ほこり)
窓の隙間から聞こえる風の音
空き教室の黒板の落書き
窓を打つ雨音　……

打ち合わせもなしに、自由詩のスタイルで連歌・連句のようなものが成立してしまったのだ。ツイッターなど、言葉の社交場は2ch以外に広がっている。しかし、二十一世紀初頭、2chが良かれ悪しかれ日本語が最も躍動した場所であったことは記憶されるべきだ。

# 「世界観」の拡大と縮小

私が、世間で評判が悪いらしい2ちゃんねるの肩を持ちたくなるのは、少し前に触れた為政者たちの地名に対する軽薄さなど、リアルな世界の言葉の状況に憤慨しているせいでもある。

最近悲しくなるのは、「世界観」という言葉がおかしな意味の拡張をされていることである。

「ミッキーとミニーのシックで可愛いパッケージが特徴で、ディズニーの世界観である"楽しさ"や"わくわく感"を楽しむことができる」

「ロイヤルとアスリートの二つの世界観をより訴求するという方向で、カラーも開発した」

それぞれ、有名な製菓会社と自動車会社の新商品の説明に出てきた言葉である。言いたいことが全然分からないわけではないが、違和感を覚える人は多いだろう。

このような「世界観」の使い方は、実は、わが文芸創作学科の学生たちの間でも、何年か前から出現するようになっていた。

「作品の世界観がよく表されている」とか「この作品の世界観では、キャラクターと服の色

が関連づけられていて……」とか。

彼らの言う「世界観」とは、作品の舞台設定や雰囲気のことらしく、背後に隠れた作者の意図という含意もあるようだ。

私はこうした「世界観」の用法を認めたくない。

一つは、設定や雰囲気と言うより、「世界観」を使った方が立派に聞こえると思っていそうなこと。もう一つは、「世界観」という言葉が元々持っていた大きな意味を、個々の商品や作品という小さな世界に縮めて押し込んでしまったこと。

イギリスの批評家テリー・イーグルトンの言を借りれば、「世界観」という言葉は「死のもつ意味とか、宇宙における人間の位置といった根源的なことがらにかかわる」「世界観」という言葉が商品や作品の大きさに縮んでしまったとしたら、私たちの世界も一緒に縮小することになるだろう。

# レッテル

前回のテリー・イーグルトンの引用は大橋洋一訳『イデオロギーとは何か』から。「イデオロギー的」という言葉を聞かなくなった。これは、かつて、保守勢力が革新勢力に対して、観念的な思想にとらわれて政治姿勢が硬直している、といった意味で使った言葉だが、実際には、個々の言動や行動を批判する代わりに、所詮社会主義にかぶれた左翼の言うことだ、とレッテル貼りをしていたのである。だから、ソ連が消滅し、社会主義勢力が衰退すると、「イデオロギー的」という言葉は死語化した。

最近、逆方向からのレッテル貼りが行われている。「ネトウヨ」という言葉がそれだ。「ネット右翼」の略らしい。2ちゃんねる（以下、2ch）発の言葉で、私はこの言葉が乱用されていく経過をほぼリアルタイムで見ていた。

2chでは、かつては政治的に右側からの発言が多い傾向があり、それへの反論を含めて、どういう議論が行われるのかに関心があった。

「欧米諸国は過去の植民地支配について一切謝罪しないのに、なぜ日本だけ何度も謝罪を要求されるのか?」という話題が提供されたとしよう。2chなら活発な議論ができるものと期

待していると、直接の反論はない。代わりに、話題を持ち出した人とその擁護者に向かって攻撃が続くのである――ネトウヨ、ネトウヨ！　お前らはネットでしかものを言えない臆病者の右翼、ネトウヨだ！　と。やがては、ネトウヨ批判の「コピペ」でスレッドが埋め尽くされ、議論の場自体が維持できなくなる。こうした場面を何度も見た。どうやら組織的な動きだったようだ。

その結果どうなったかというと、一つ目、私はネトウヨという言葉を使って批判する人を信用しなくなった。二つ目、議論ができない状況に失望して、2chを訪れる機会が激減したのである。これこそ「ネトウヨ批判」の狙いだったのかもしれない――。

民主主義の価値を信じる人は、右であれ左であれ、自由で活発な議論を大事にするはずだ。レッテル貼りは見たくない。

# 噂と小話

先日、私の所属する文芸創作学科の女子学生が、フェイスブックをやっているのは幸せそうな、今の生活が充実している人たちで、2ちゃんねる（以下、2ch）やツイッターにはまるのは現状の生活に不満を持つ人が多いように感じます、わたしは2ch・ツイッター派ですが、と発言したので笑ってしまった。

彼女の言う通り、フェイスブックは投稿者の幸福な家族や豊かな人間関係を彷彿させる写真や書き込みが多く、一方、2chは、孤独な気配の漂う「住民」たちが、殺伐とした空気の中、攻撃的な言葉と自虐の味の混じったユーモアをやりとりしている。ツイッターはネットに吐き出される独り言だろうか？

私が2chにはまったのは、この自虐的なユーモアのセンスに惹かれたことが大きい。世間の表に出ない情報の宝庫であることも魅力だったが、こちらは真偽が怪しいことが前提で、2chを使うのは「嘘を嘘と見抜ける人でないと難しい」（2ch創設者西村博之氏の言葉）。

ネット上の交流の特色が、アンダーグラウンドの情報に自虐的な味わいのあるユーモアだとすると、それは意外にも、社会主義下のソ連・東欧諸国において、公的な情報を信じない

人々が噂のネットワークをはりめぐらし、政治風刺の小話＝アネクドートが盛んだった状況に似ている（今の日本だと既成メディアによる情報統制への抵抗）。現状に不満な人々の思いは、噂と小話に託して語られるものなのかもしれない。

さて、左は2ch風政治小話の一例。どこに「嘘」が含まれているでしょうか？

「日本の右傾化、軍国主義化を憂う東アジア諸国が集まって協議した結果、第二次大戦後の七十年間一度も戦争をしたことがなく、核兵器、対地攻撃用長距離ミサイル、徴兵制を持たない一方で、複数政党制、自由選挙で選ばれる議会、言論・表現の自由を長く維持して来た日本は東アジアにおいて異端の存在であり、世界最悪の軍国主義国家であることが確認された」

# 私という宿命

群像文学新人賞を受賞したのが、ちょうど三十年前、一九八三年の五月だった。それは三十歳になる年のことだったので、小説の書き手として世に出る前と後の年月が、今年でちょうど半々ということになる。

それだけの時間があれば、もっとましな仕事ができたのじゃないかという思いと、これまでよく続けて来られたものだという肯定的な気持ちと、両者の配分はだいたい半分半分である。

私の人間的資質の根本は人見知りの引きこもりなので、机の前で一人でできる小説書きは「憧れの仕事」だった。それはある意味実現されたわけだが、そうなってみて分かったのは、人に会わずに引きこもっていると書く力が減退していくということだった。

人と人とのつながりは、どんな人間にも欠かせないのである。そのつながりを「人間関係」と表現するとストレスの源みたいだし、今風に「絆」と言えばポジティブな雰囲気になる。そのストレスとポジティブな面のどちらもが、小説を書くのに必要であるらしい。

ところで、「人見知りの引きこもり」である自分をよく観察してみると、私は実は他人が

嫌いでないことに気づく。私は他の人の話を聞くのが好きだ。嫌いなのは、恐らく、他人と会っているときの自分なのである。よその人といて、うまく振る舞えない自分に出会うのがイヤなのだ。年齢と共に、こうした「人間関係に不器用な自分」とある程度は折り合えるようになった。とはいえ、苦手を克服したとは言えず、「人付き合いの達人」になるなどとは夢にも考えられない。

こんな厄介な「自分」と、六十年つきあって来た。当たり前だが、自分という宿命からは逃れられないのである。かくして、人生は最初から最後まで難しい。人生がもっと簡単だったらいいのに……しかし、簡単でないからこそ、私は小説を書き続けているのだろう。

この欄での私の連載は、次回が最終回です。

さて、最終回である。

ずっとエッセイの仕事から逃げて来て、再開したのがこの五十回連載。やってみたら勉強になったし、苦心したことも含めて、楽しかった。勉強になったのは、エッセイとは何ぞやということに留まらない。文章を書く上でもずいぶん発見があった。

別の感想もある。私はもうヘトヘトなのだ。

最後にもう一度、阿部昭「単純な生活」に登場してもらおう。

文章を書くという仕事は、決して頭だけ手先だけの仕事ではない。本当に気合いの入った文章は、頭でも胸でもなく、臍（へそ）のあたりに力をこめて書かなくてはならぬ。だから、ほとんど肉体の全身の全身の労働なのだ。重い荷物を運ぶのや、深い穴を掘るのと同じである。

「本当に気合いの入った文章」を私が書けていたかどうかは怪しいが、そう心がけてはいた

のは確かだ。

そもそも私はどんな小さな文章でも、たとえば勤務先の事務的なものでも、一生懸命にならないと書けない。ましてエッセイとなると、多少なりとも自らの生活を晒し、我が身を削ることが必要だ。私小説作家阿部昭の労苦が、少しだけだが分かった気がした（私小説でない小説を書くのが楽ということではありません。念のため）。

書き出す前はもちろん書いている途中でも、話題に困らないように材料を蓄えていたのに、結局使わないままで終わったものがある。

去年の三月から髭を伸ばして連載開始時に一周年だったのだが、書きそびれている内、三月が終わって書きにくくなった。パソコンで「機会がなく」と打とうとしたら「機械が泣く」と出て来たので、これで一話書けるかと思ったものの、パソコンの誤変換ネタはとうに旬を過ぎているせいか気分が乗らず、見送った。「簡単な人生」が、実は「イージー・ライフ」＝「伊井爺（じい）の生活」という駄洒落でもあったことは、打ち明けるかどうか迷った……結局最後に書いてしまった。どうやらもういいネタは残っていない。ここらで店じまいするのが身のためのようだ。

みなさん、お元気で。

**簡単な人生**　エッセイ集

発　行　令和元年　五月十五日

著　者　伊井直行
II Naoyuki ©2019
発行所　レワニワ書房　https://rewaniwa.com/

**Rewaniwa**